

『荒涼館』にみる看護・ジェンダー・階級

Nursing, Gender, and Class in *Bleak House*

西垣 佐理 (Sari NISHIGAKI)

I. はじめに

ヴィクトリア朝文学の中で、病や癒しの場面は一種のコンヴェンションとなっており、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870) の作品においても、これらの場面がしばしば物語展開の重要な鍵を握っている。後期小説の一つ『荒涼館』 (*Bleak House*, 1852-53) にも、「看護」¹の場面が散見されるが、中でも重要なのは主人公のエスター・サマソン (Esther Summerson) の行う看護だろう。彼女は伝染病にかかったメイドのチャーリー (Charley) を看病し、その結果自分も感染して美貌を失う。つまり看護行為が、彼女の女性としての運命を左右することになる。また、彼女と結ばれることになる男性アラン・ウッドコート (Allan Woodcourt) は外科医であり、こちらはまさに職業的に病と癒しに携わる存在である。彼は多くの患者を手当し、チャーリーが感染する原因となったジョー (Jo) の最期を看取ってやるなど、常に献身的で理想的な医者として描かれている。

このように、『荒涼館』における病・看護・医療は、当時の社会事情の反映として作中に描かれているのではなく、物語の展開や登場人物の生き様に影響を与える重要な構成要素となっている。そして、そのような諸要素を作家ディケンズが物語の素材としていかに用いたのかを考察することは、作品の新たな読みを模索する上で大きな手がかりとなるだろう。

そこで本論では、まず、当時の社会背景としての看護がどのようなものであったかを歴史的に概観する。続いて、『荒涼館』に登場する看護のさまざまな事例を取り上げ、「女性の看護 / 男性の看護」および「看護する者 / される者」の関係に見られるジェンダーや階級の問題とも絡めながら、看護行為が物語の展開にどのような影響を及ぼしているのかを検討し、作品において看護の持つ意味を考察していきたい。

II. ヴィクトリア朝社会における「レスpekタブル」な職業としての看護

さて、『荒涼館』における看護の意義を考察するために、19世紀半ばのイギリスで「看護」を扱

う職業の社会的位置づけが劇的に変化した事実に注目しなければならない。元々、看護について Robert B. Shoemaker は “As wives and mothers, women were expected to provide medical care for their families. Girls learned ‘physick’ from their mothers, and women augmented their skills from manuals of housewifery.” (Shoemaker 180) と述べている。では家庭の外ではどうかということ、その頃の看護師は基本的に労働者階級の職業で、主に貧しい人たちのための病院や救貧院で働き、通常の家事使用人よりは給料が高かったものの、² 看護師としての訓練や教育を殆ど受けていなかった。患者の扱いもひどく、多くはアルコール中毒者であり、年齢は 40 歳以上が大半であるが、若い看護師の中には娼婦と兼業のものもいた。『荒涼館』の 10 年ほど前にディケンズが『マーティン・チャズルウィット』 (*Martin Chuzzlewit*, 1842-43) で描いた、悪名高き産婆兼看護師ガンプ夫人 (Mrs. Gamp) の姿は、こうした看護師の実態を雄弁に伝えるものである。『荒涼館』の書かれた 1852-53 年頃には多少の改善が見られたものの、依然として看護師の地位は低いままだった。Jane Rendall が指摘するように、「1851 年の国勢調査では、プロの職業ではなくて、家事使用人の形態で記録されていた」のである (Rendall 75)。³ 看護師が女性の公的職業としてふさわしいものとして認知されるためには、Rendall が “[t]he new jobs for women were to be posts which fitted the middle-class Victorian conception of womanhood.” (Rendall 71) と述べているように、明らかに中流階級を意識したものでなければならなかった。そして、ヴィクトリア朝社会において「中流階級性」を表す鍵となる要素が、レスペクタビリティ (respectability) だったのである。レスペクタビリティとは、Sally Mitchell が説明するように、「絶対的な定義はない」ものだが、「自立という概念と密接に結びついて」いる (Mitchell 262)。特に、経済面において人の援助なく自立し、儉約を旨とすることが「美德」であり、かつ、精神面においても慎ましかで、真面目で正直であることが好ましいとされた。ただし、経済上の自立は男性に対して求められ、精神面は女性に求められていたという点には注意を払わなければならない。男女の職業に関する性的役割分業が明確に固定されていた当時、中流階級の女性にふさわしい職業であるためには、精神面のレスペクタビリティが強調される必要があった。ゆえにレスペクタビリティの有無は階級の差を生み出す要因の一つとなり、職業選択においても重要視されることとなったのである。

さらに、Barbara Ehrenreich と Deirdre English は看護という職業を次のように述べている。

To the doctor, she brought the wifely virtue of absolute obedience. To the patient, she brought the selfless devotion of a mother. To the lower level hospital employees, she brought the firm but

kindly discipline of a household manager accustomed to dealing with servants. (Ehrenreich and English 36-37)

ここにみられるように、看護師という職業は、妻・母・家政婦としての役割を求められていたことが明らかにわかる。また、セアラ・エリス (Sarah Strickney Ellis)に代表されるようなコンダクト・ブックの作者たちは、女性の「道徳的感化力」(Ellis 50)の重要性を説いていたが、中流上層階級出身であるナイティンゲールの改革を待って初めて、看護が女性の感化力や母性を発揮する仕事と認知され発展していくことになる。同様に医師という職業も、ヴィクトリア朝期に牧師・弁護士と並ぶ「レスpekタブル」な専門職(プロフェッション)と認知され、女性性・母性と結びついた看護師像をいわば補完する形で、男性性や父性(父権性)を発揮する職業となっていくのである。

ゆえに、EhrenreichとEnglishは、以下にあるように医者と看護師が各々理想の男女のあり方として提示されていることを示唆する。

Doctoring and nursing arose as complementary functions, and the society which defined nursing as feminine could readily see doctoring as intrinsically “masculine.” If the nurse was idealized Woman, the doctor was idealized Man—combining intellect and action, abstract theory and hard-headed pragmatism. (Ehrenreich and English 40)

これら二つの職業意識は「経済的自立」を主とした「美德」とみなす中流階級の価値観および性的役割分業にかなうものだった。ナイティンゲールが作り上げた「(男性)医師をサポートする(女性)看護師」という範例は、ヴィクトリア朝のジェンダー観を忠実に反映するものであり、だからこそ看護という職は中流階級の女性たちに積極的に受け入れられたのである。

また、当時はコレラやチフスなどの度重なる流行によって、エドウィン・チャドウィック(Edwin Chadwick)の『大英帝国における労働者の衛生状態に関する報告書』(*Report on the Sanitary Condition of the Labouring Population of Great Britain*, 1842)の発表や、1848年の公衆衛生法(The Public Health Act)の施行に見られるように、公衆衛生に関する意識が高まった時代でもあった。病・看護・医療は当時きわめて新しいホットな領域であり、その意味で、医療従事者はまさに時代の先駆的存在だったといえるだろう。

III. 『荒涼館』にみる看護とその意義

以上を踏まえて、『荒涼館』における看護を見ていこう。作品にはさまざまな看護が見られるが、主要人物に関わるものとして3つの看護が挙げられる。すなわち主人公のエスターとメイドのチャーリーの看護、エイダの看護、そして医師アラン・ウッドコートの看護である。これらの看護を、それぞれ検討し、意義を確認していくことにする。

「美」を克服する「義務」 エスターの看護

物語中盤、主人公のエスターは十字路掃除人ジョーから感染したメイドのチャーリーを看病することになる。エスターはエイダのコンパニオンかつガヴァネスであり、家政婦 (housekeeper) として荒涼館の家政一切を取り仕切る。彼女は職業看護師ではないにもかかわらず、非常に有能な看護人でもあり、献身的に患者に付き添うのは無論のこと、以下のように自ら指示を出して看護の環境を整える。

They put a bed for me in our sitting-room; and by keeping the door wide open, I turned the two rooms into one, now that Ada had vacated that part of the house, and kept them always fresh and airy. (459)

下線部に見られる部屋の換気及び清浄さに関しては、Mitton が “Early Victorians believed that disease was caused by foul air, or miasma, given off by stagnant water and stinking cesspools.” (Mitton 5) と言うように、初期ヴィクトリア朝の人々は病が汚染された空気や汚水によって引き起こされると考えていたため、チャドウィックやナイティンゲールらが提唱した、当時新しいとされた感染予防の方法である。⁴ それを用いるエスターは、公衆衛生に関して高い意識を持っていると分かる。また、彼女は自分が病に陥ったとき、チャーリーを呼んで次のように看護の指示を与える。 “If I am to be ill, my great trust, humanly speaking, is in you. And unless you are as quiet and composed for me, as you always were for yourself, you can never fulfil it, Charley.” (463) そしてエスターは、指示どおりに部屋を清浄に保って看護を遂行したチャーリーを誉める。 “First, I complimented Charley on the room; and indeed, it was so fresh and airy, so spotless and neat, that I could scarce believe I had been lying there so long.” (515) こうした例からもわかるように、エスターは、たとえ看護される立場にあっても看護の主導者であることが分かる。更に病身のチャーリー

に対して、エスターが献身的に看護を行い、神に対して敬虔な様子が見られる。彼女は、荒涼館の家政を一手に引き受ける有能な主婦の役割を果たしていたが、その有能さ・献身は看護においても遺憾なく発揮される。こうしてエスターは、家庭における有能な主婦かつ看護人として、すなわち母性的で家庭的なヴィクトリア朝中流階級の理想的女性として描かれる。

次にメイドのチャーリーだが、彼女は最初エスターに看護され、回復後エスターを看護する。彼女が指示どおりにエスターを看護するのは既に見たとおりだが、それ以前に、そもそも彼女たちの病の感染源となったジョーと接する場面で、チャーリーは看護人として提示されている。

My little Charley, with her premature experience of illness and trouble, had pulled off her bonnet and shawl, and now went quietly up to him with a chair, and sat him down in it, like an old sick nurse. Except that no such attendant could have shown him Charley's youthful face, which seemed to engage his confidence. (451)

下線部にみられるように、ここでのチャーリーの姿は、職業看護師像に一瞬重なるように描かれながら、否定的な印象を若さによって払拭し、信頼に値する存在として提示し直されている。看護師批判が透けて見えることも興味深い点ながら、なにより、具体的な看護行為に先立って彼女に「看護師」というプロフェッショナルなイメージを与えている点が注目し得る。それは、素人女性の献身的な介護が、職業看護師の有能さにも匹敵することを示唆している。このイメージがあればこそ、チャーリーやエスターが感染したのは、単なる憐憫の情や博愛精神によるのではなく、彼女たち自身が看護人として自発的に行った看護の結果ということになるのだ。

病にかかった二人は一命を取りとめ回復するが、結果として二人とも美貌を失う。いわば彼女たちは、良き看護人として献身的な看護を行ったがゆえに美貌を失ったわけである。これは一体何を意味しているのか。看護によって美貌を失ったことで、主人公エスターの物語がどのように変化したのか考えてみよう。

孤児のエスターは、自分は罪を背負って生まれてきたのであり、この世で生きるために「服従・克己・勤勉」(26)を身に付けるよう、養母である伯母に求められた。“I thought it best to be as useful as I could, and to render what kind services I could, to those immediately about me; and to try to let that circle of duty gradually and naturally expand itself.” (117) とあるように、エスターは、大人になってからも常に自分の「義務」(“duty”)を果たし、従順で美德ある女性でいるように努力してきた。ここでいう「義務」とは、コヴェントリー・パトモア (Coventry Patmore, 1823-96)の詩、『家庭

の天使』(The Angel in the House, 1854-62)に見られるような、家政を切り盛りし、家を快適に保ち、家族に献身的に振舞う理想的で有能な家庭人であること、すなわち中流階級的な理想の女性像を具現化するような行為を指す。無論、その行為には女性としての献身、勤勉さといった資質も含まれる。エステルはこうした義務を果たし、人に愛されるよう努力を重ねる。そうした「義務」の表象として看護行為がなされ、そのために病を得て美貌を失う。

ここで重要なのは、看護によって容貌が変わった後、アランへの思いを断ち切るため自分に言い聞かせるように以前よりさらに「義務」を強調するようになる、ということである。つまり、以下の引用にあるように「義務」は失われた美貌を埋め合わせる行為として考えられているのである。

What should I have suffered, if I had had to write to him [Allan Woodcourt], and tell him that the poor face he had known as mine was quite gone from me, and that I freely released him from his bondage to one whom he had never seen!

O, it was so much better as it was! . . . I could go, please God, my lowly way along the path of duty, and he could go his nobler way upon its broader road; . . . (526)

エステルは自分を愛していたかもしれないアランに容貌の変化を打ち明けずに済むことを喜び、自分は義務の道を進めばよいと考える。また以下の引用のように、

‘Once more, duty, duty, Esther,’ said I; ‘and if you are not overjoyed to do it, more than cheerfully and contentedly, through anything and everything, you ought to be. That’s all I have to say to you, my dear!’ (562)

と改めて自分に言い聞かせ「義務」の遂行に邁進する。というのは、自分の容姿が(多少謙遜しているものの)以前のような魅力を備えたものではないと認識しているからである。しかし、このようなエステルのあり方はアランに認められる。物語の最後、二人の会話の場面で、

‘I [Esther] have been thinking, that I thought it was impossible that you *could* have loved me any better, even if I had retained them [my old looks].’ . . .

‘And don’t you know that you are prettier than you ever were?’

I did not know that; I am not certain that I know it now. But I know that my dearest little pets are very pretty, and that my darling is very beautiful, and that my husband is very handsome, and that my guardian has the brightest and most benevolent face that ever was seen; and that they can very well do without much beauty in me—even supposing—. (914)

とあるように、エスター自身も容姿の良し悪しにとらわれずに夫に愛されている自分を認め、自分に美しさがなくてもいいのではないかと肯定的にとらえるようになる。つまり、「義務」に生きるエスターがアランと結ばれて幸福になることで、「義務」が「美」(“beauty”)に対する劣等感を乗り越えるのである。言い換えれば、エスターの物語とは、「義務」が「美」に勝利する物語なのである。物語前半では「義務」と「美」の両方を兼ね備えていたエスターであるが、やがて「義務」が「美」を駆逐し、勝利するに至る。その決定的な転機となるのが、「義務」の遂行としての看護行為に他ならない。献身的看護のせいで美貌を失うことは、表層的にはあたかも「美德や慈善行為が罰される」かのように見える。しかし、「義務」が「美」に勝利するという文脈で考えるなら、献身的看護という義務が美貌の排除につながるのは論理的にまったく当然であることが分かる。

ところで、エスターの美しさは母親譲りであるため、彼女の美貌は母親との関係を含む。そして、彼女の母親は、まさに「義務」なき「美」の代表者として描かれているのだ。エスターの母はその美貌によって準男爵サー・デッドロック (Sir Dedlock) に見初められ、レディ・デッドロック (Lady Dedlock) となっているが、彼女とキャプテン・ホードン (Captain Hawdon) との間にできた不義の子がエスターである。したがって、エスターはいわば母親、すなわち「美」の過ちを刻印された存在といえる。無論「美」には女性のセクシュアリティが含まれる。エスターの美貌は母親の罪の証であり、それから逃れるためには「義務」、すなわち献身的な看護行為によって病に感染する必要があったのである。エスターの病は容貌を損なうことから天然痘とされているが、⁵ Carolyn Dever が言うように、その病は「彼女の出自に対する償い」(Dever 99) となる。エスターの顔の痘痕は彼女の出生の秘密を隠す役割を果たす。エスターが病に陥る前、ジョーと法律事務所書記のガッピー (Guppy) はエスターとレディ・デッドロックの容貌の類似を疑っていたが、エスターが病から回復した後は、美貌が損なわれたため、エスターがレディ・デッドロックと会った際にも両者を親子ではないかと怪しんだものはいない。母親譲りの美貌を失ったとき、エスターは「美」=セクシュアリティに関わる罨を逃れ、母親の過ちを繰り返す恐れがなくなる。看護と病の後、美貌を失ったエスターは、セクシュアリティが隠蔽されることで「義務」のみに生きる新たな自己を得たといえよう。

エステルとチャーリーは看護によって美貌を失ったが、最後には、いわば美德の報いとして、自分たちにふさわしい(かつ自分たちの望んだ)伴侶を得ることになる。作品に登場する他の美女たち、「美」に属するレディ・デッドロックやエイダが不幸な結末を迎えるのとは対照的に、「義務」を遂行するエステルは外科医のアラン・ウッドコートと、チャーリーは裕福な粉屋と幸せな結婚をし、こうして「義務」が「美」に対して鮮やかな勝利をおさめるのである。

ただし、この背後には「義務」が「美」に勝利しないと美德が体现できない点で、「義務」と「美」が両立できない、という時代の制約が存在していたことは忘れてはならない。つまりヴィクトリア朝女性に対する「美德」が精神面において強調されるがゆえに、エステルの「義務」が価値あるものとして賞賛されるのである。

女性の看護と経済 エイダの場合

これまでエステルの看護を中心的にみてきたが、次にエイダの看護を見ていくことにする。エステルがコンパニオンとして引き取られたジャーナリスト家での話し相手であるエイダは、エステルより身分が高く、繰り返し言及されるように非常に美しい女性である。遠縁のリチャード・カーストーン (Richard Carstone) と秘密裏に結婚後、裁判によって精神的にも経済的にも立ち行かなくなり、病に陥った彼を看病する。が、裁判の結果遺産が得られないとわかったリチャードは、ショックのあまりエイダの看病の甲斐なく死んでしまう。つまり、エイダの看護は物語展開に何の影響も与えないのだ。エステルの場合と対照的に、「美」の側に立つエイダは、リチャードとの秘密の結婚、といった点からみても美德から反しており、ゆえにたとえ妻としての「義務」を果たしてもそれが報われることはない。ただしリチャードの病の原因は、安定した職を持たないという自らの経済的・社会的不安定さと、遺産相続裁判の結果に依存する精神的弱さに起因するものである。“self-help”という価値観が席卷した時代において、定職を得ることは中流階級的な意味での男性性・父権性を築く基礎であるが、⁶ それができないリチャードには自力での回復は不可能なのだ。

また、経済的回復(この場合遺産相続の見込み)が一番の薬であった以上、女性による看護は、それが持つ道徳的感化力も含めて殆ど無力で、効果がない。更にリチャードはエイダが相続予定の財産までも裁判や借金によって失い、その片をつけてくれる男性の救世主も現れることはない。ディケンズの作品には、『リトル・ドリット』のエイミー・ドリット (Amy Dorrit) とその兄ティップ・ドリット (Tip Dorrit) の例にも見られるように、経済的不調が病の遠因となる場合が多く、

その場合、どんなに女性が献身的な看護をしても回復しない場合が散見される。その点で、この事例はディケンズ小説における女性による看護の限界を示す例といえることができるだろう。

男性による英雄的医療 レスペクタブルな専門職としての医者アラン・ウッドコート

これまで女性の看護を見てきたが、今度は『荒涼館』に登場する男性の癒し手、外科医のアラン・ウッドコートについて考えていくことにする。⁷ アラン・ウッドコートは Joanne Eysell も指摘するように、『リトル・ドリット』 (*Little Dorrit*, 1855-57) の “Physician” と並び、きちんと仕事をするという点でディケンズ文学においては「例外的」存在の医者である (Eysell 26)。『荒涼館』では、ベイヤム・バッジャー (Bayham Badger)、ハロルド・スキムポール (Harold Skimpole) と並ぶ3人の医者の中で、このうちアラン一人が例外的に作中で様々な貧しい人々を献身的に手当する。彼は有能な医師でもあり、世間から高く評価されてもいる。ただし、当時の外科医の地位は内科医のそれほど高くはなく、更に競争が激しいこともあって、彼は経済的には貧しいままである。

しかし、ウッドコートはインドからの帰りの船が難破した際、献身的に多くの人々を救ったことで英雄視されるに至る。以下は、彼の患者の一人ミス・フライト (Miss Flite) が語るそのときの彼の様子である。

There, and through it all, my dear physician [Allan] was a hero. Calm and brave, through everything. Saved many people in his spare clothes, took the lead, showed them what to do, governed them, tended the sick, buried the dead, and brought the poor survivors safely off at last! My dear, the poor emaciated creatures all but worshipped him. They fell down at his feet, when they got to the land, and blessed him. The whole country rings with it. (525)

「英雄」と称されるアランは多くの患者に手当や看護を行うが、特に重要な患者は、チャーリーとエステルに病をうつした少年のジョーだと考えられる。そこで、アランのジョーに対する看護について検討してみよう。まず、アランはロンドンの架空のスラム街、トム・オール・アローズ通りで衰弱しきった状態でジョーが帰ってくるのを見つけ、彼をつききりで看病して最期を看取る。その際、アランはジョーに彼が一度もしたことがないという祈りの言葉を教え、ジョーはその言葉を口にしながら死んでいく。ジョーは、アランに引き取られるまで、自分がエステルたちの病の原因となったことを知らなかったが、その事実を知らされ、彼なりに謝罪の気持ちを抱く。このよ

うにアラン・ウッドコートは、身体的に多くの人を癒すだけでなく、ジョーとの関係のように、患者を精神的に導く道徳的指導者としての役割をも担っている。これは一種のモラリストとしての医者像であり、母性的な看護師と対をなすように医者が父権的権威を持つというヴィクトリア朝の考え方が反映されていると考えられる。⁸

物語展開という点についていえば、エスターが看護をつうじて人生を一変させたのとは異なり、彼は職業として医療行為を行っているのであって、ジョーを改心させたとはいえ、彼自身の人生が大きく変わるわけではない。ただし、ジョーという患者に対して看護の主体となる人物を考えると、直接的な看護者となるのは無論外科医のアランである。一時的な看護人としてはチャーリーも挙げられるが、具体的な看護行為というより「看護師」のイメージが主なので、ここでは考慮しない。そして、間接的に看護人として病を癒し伝染を止めたのはエスターであることが分かる。つまりエスターとアランは、二人ともジョーという共通の患者に対する看護主体となっているのだ。その看護行為においてエスターが母性を、医者のアランが父性を発揮するとすれば、二人が間接的にジョーという無力な子どもの親代わりとなっている構図が浮かび上がる。それは、最終的に看護人役のエスターと医者のアランが結ばれることを暗示するものでもある。二人が結ばれた後、物語の終わりでエスターは以下にあるように、

The people even praise Me as the doctor's wife. The people even like Me as I go about, and make so much of me that I am quite abashed. I owe it all to him, my love, my pride! They like me for his sake, as I do everything I do in life for his sake. (913)

と、アランのおかげで自分も尊敬されると言っているが、それは医者という職業が当時ヴィクトリア朝においてレスpekタブルと見なされ始めた職業だったからでもある。そして、ここでの語り手であるエスターは、自らも有能な看護人であるにもかかわらず、あくまで夫を尊敬し立てることによって、謙遜の美德をもった理想的な妻として自らを提示する。こうしてアランは、人々にも妻にも尊敬される文字通りレスpekタブルで理想的な男性となるのである。

IV. まとめ

改めて『荒涼館』に登場する看護をジェンダー・階級という点からまとめてみよう。エスターとチャーリーの相互看護は女性同士、アランとジョーの看護は男性同士だが、両者の看護にはとも

に献身性・無償性という価値が与えられているのが分かる。一方、エイダのリチャードに対する看護は、女性が男性に行くことから、当時の文学で典型的な看護の形となっている。普通はこの看護行為が成功して女性の感化力が生かされるという展開になりやすいが、これが『荒涼館』では看護の「失敗例」となっている点が特徴的である。看護が「義務」に属する以上、「美」の側に留まったエイダにリチャードを癒す力はなかったのだろう。

重要なのは、献身的看護を主体的に担うエスターとアランが、自分たちの中流階級のアイデンティティを、まさに看護や医療行為を通じて獲得しているという点である。エスターの場合、彼女の美貌は、レディ・デッドロックの不義の娘である証だったが、それを看護をつうじて失うことで、「義務」のみに生きる新たな自己を得た。美德のみに生きる彼女は、医者のアラン・ウッドコートとの結婚によってレスpekタブルな地位を得る。メイドのチャーリーも「義務」の側に立つことで最後には裕福な粉屋と結婚し、美德は経済的にも報われた。看護によって美貌を失った彼女たちが幸福と経済的安定の両方を手に入れたとき、「義務」は報われ「美」に完全な勝利をおさめたといえるだろう。また、アランは、外科医としての仕事を全うすることで社会的にも認められ尊敬を勝ち得る。さらには、ジョーに精神的な感化を及ぼす点で、父権的・道徳的権威を帯びた理想的な医者像を体現することとなった。

それだけでなく、エスターとアランは、看護行為をつうじて物語における hero/heroine となっている。アランは既に見たとおりだが、エスターの看護はというと、物理的・身体的には彼女自身とチャーリーを癒したに留まり、「英雄」と呼べるほどの影響力はないように見える。しかし、ジョーの病は彼一人のものではなく、トム・オール・アローンズ通りの復讐の証とされ、以下の引用のように、「社会的悪」という象徴性を帯びている。

But he [Tom-All-Alone's] has his revenge. Even the winds are his messengers, and they serve him in these hours of darkness. There is not a drop of Tom's corrupted blood but propagates infection and contagion somewhere. [...] There is not an atom of Tom's slime, not a cubic inch of any pestilential gas in which he lives, not one obscenity or degradation about him not an ignorance, not a wickedness, not a brutality of his committing, but shall work its retribution, through every order of society, up to the proudest of the proud, and to the highest of the high. Verily, what with tainting, plundering, and spoiling, Tom has his revenge. (656-57)

そして「社会的悪」の象徴たるジョーの病をエスターが癒すことは、病の階級移動を最新の衛生

観念を用いて食い止めたとも言えるのである。翻せば隠喩としての「社会の病」を癒したとも考えられる。この意味で、エスターは heroine の名にふさわしい看護人であるといえるだろう。

アランとエスターは看護・医療行為を通じて hero/heroine となったが、くしくも作品出版の1年後、ナイティンゲールがクリミア戦争での看護行為で時代の“heroine”となる。Elizabeth Langland は、エスターが“the Florence Nightingale of bourgeois housekeepers, extending her method across the face of England.” (Langland 94) といみじくも言うように、ディケンズは、『荒涼館』のヒロイン・エスターの看護に、献身性や美德だけでなく公衆衛生の観念を加え、病の階級移動の阻止という意義を与えた。彼がそれによって看護を単なる家事労働から社会的活動へと変容させようとしたのだとすれば、エスターはナイティンゲールの先駆的ヒロインといえるかもしれない。いずれにせよ、「看護」というテーマが『荒涼館』という作品を読み解く上できわめて重要な鍵であることを確認し、結論に代えることとする。

*本稿は日本ヴィクトリア朝文化研究会第6回大会(2006年11月18日、於神戸女学院大学)における研究発表に加筆・修正を施したものである。

**引用文中の下線はすべて筆者によるもの。

註

1. 「看護師(人)」(“nurse”)の定義及び呼称を簡単に押さえておく必要がある。OEDによると、“nurse”とは、「(1) 赤ん坊に乳をやる女性(乳母)、(2) 他人の世話をを行う人、(3) 病人の看護を行う人(一般に女性) = 看護師」とあって、看護をする主体は大抵女性である。一般に、(1)を“wet-nurse”、(2)・(3)を“dry-nurse”と呼ぶ。本論では、基本的に(2)・(3)を主に扱い、職業看護師を「看護師」、及び女性の義務として看護を行う人を「看護人」と区別して表記する。
2. Sally Mitchell は、看護師の給料を“a shilling per day in London, plus room and meals” (Mitchell 200) と述べており、労働者階級の仕事としては比較的良い方であったとしている。
3. ナイティンゲールは、『看護覚書』(Notes on Nursing, 1860)の Appendix に1851年の国勢調査当時の看護師の登録者数を表にして載せているのだが、それによると、職業看護師の登録者数は25,466名で、家庭使用人の看護師は39,139名と、家庭使用人が看護師を兼ねている方がはるかに多かったことがわかる(但し、こちらのnurseには、10代の子守の数も含まれているからであろう)。さらに年代別に見ると、40代以上職業看護師の数が21,548名と、全体の84%を占めていることもわかる。

4. ナイティンゲールによる換気や清掃の提唱は、特に『看護覚書』 pp. 9-34 に詳述されているが、特に家の健全さのために必要な 5 つのポイントとして “1. Pure air. 2. Pure water. 3. Efficient drainage. 4. Cleanliness. 5. Light.” (Nightingale 24) とあげている。エステルの看護は、これらの要素をきちんと押さえていて、まさに当時の看護の一方法を実践しているといえよう。
5. エステルの病については諸説あるが、公式には天然痘とされている。しかし、オックスフォード・クラシックス版の『荒涼館』では、学者によってはチフスだという人もいる。医学的な見地からの解説は、Gilian West の “*Bleak House: Esther’s Illness,*” pp. 30-34 に詳しいが、ここではエステルの病は天然痘だと結論付けられている。
6. ヴィクトリア朝の男性性の確立には、John Tosh が “Masculinity, after all, was essentially about being master of one’s own house, about exercising authority over children as well as wife and servants. Indeed rule as ‘father’ embodied the primary meaning of the term ‘patriarchy.’” (Tosh 89) というように、まず家庭の主人たることが必要なのだが、そのためには、プロフェッションの確立及び経済力の安定が必要で、職探しに失敗し、遺産相続の当てが外れたりチャードは、いくら家庭を持っても(エイダという妻を得ても)、一家の主人になれないのは自明である。
7. 女性と男性の看護行為を同列に見なすのは違和感があるかもしれないが、当時は医者(特に外科医)もまだ完全に父権的権威を獲得していないという点、および、看護行為の本質、すなわち人を肉体のみならず精神をも癒すという精神は共通したものだと考えられるので、ここでは同列に取り扱うことにする。
8. 医師の父権的道德感化力が、とくに精神病院の患者にたいして大いに発揮されていたという事実は、ミシェル・フーコー (Michel Foucault) の『狂気の歴史』 (*Madness and Civilization: A History of Insanity in the Age of Reason*, 1961) 第4章「医師と患者」に詳しいが、精神病院に限らず、医師の父権性は医師という専門職のレスpekタビリティ獲得、及び看護職の女性性付与による相対化のおかげで必然的に高められていったといえる。

引用文献

- Dever, Carolyn. *Death and the Mother from Dickens to Freud: Victorian Fiction and the Anxiety of Origins*. Cambridge: Cambridge UP, 1998.
- Dickens, Charles. *Bleak House*. Oxford: Oxford UP, 1996. なお、引用ではすべて(ページ数)であらわす。
- Ehrenreich, Barbara and English, Deirdre. *Witches, Midwives, and Nurses: A History of Women*

- Healers*. New York: The Feminist Press, 1973.
- Ellis, Sarah, Strickney. *The Women of England: Their Social Duties, and Domestic Habits*. 2nd ed. London: Fisher, Son and Co. 1839.
- Eysell, Joanne. *A Medical Companion to Dickens's Fiction*. Frankfurt: Peter Lang, 2005.
- Langland, Elizabeth. *Nobody's Angels: Middle-Class Women and Domestic Ideology in Victorian Culture*. Ithaca, Cornell UP, 1995.
- Mitchell Sally. *Daily Life in Victorian England*. Westport: Greenwood Press, 1996.
- Mitton, Lavinia. *The Victorian Hospital*. Princes Risborough: Shire Publications, 2001.
- Nightingale, Florence. *Notes on Nursing: What It Is, and What It Is Not*. 1860; New York: Dover Publications, 1969.
- Rendall, Jane. *Women in an Industrializing Society: England 1750-1880*. Oxford: Basil Blackwell, 1990.
- Shoemaker, Robert B. *Gender in English Society 1650-1850: The Emergence of Separate Spheres?* Harlow: Longman, 1998.
- Tosh, John. *A Man's Place: Masculinity and the Middle-Class Home in Victorian England*. New Haven and London: Yale UP, 1999.
- West, Gilian. "Bleak House: Esther's Illness," *English Studies: A Journal of English Language and Literature* 73-1 (1992) 30-34.

Synopsis

This paper aims to consider nursing and its function in Charles Dickens's novel, *Bleak House* (1852-53), from the viewpoints of gender and class. Three types of nursing can be observed. First, Esther's nursing is a typical example of nursing as a female household "duty." Esther has lost her "beauty" by nursing her maidservant, Charley, and her disfiguration marks a turning point both in her own life and in the narrative itself. Second, Ada's nursing results in failure, for her patient, Richard Carstone, lacks the will to recover, and is always depending on his great expectations. Compared with these examples, Allan's nursing as a doctor shows middle-class paternal authority and heroism. In conclusion, by being a nurse and a doctor, Esther and Allan become not only an ideal couple, but also literally the heroine/hero of the novel. In this respect, nursing in *Bleak House* functions as a crucial aspect of the narrative.